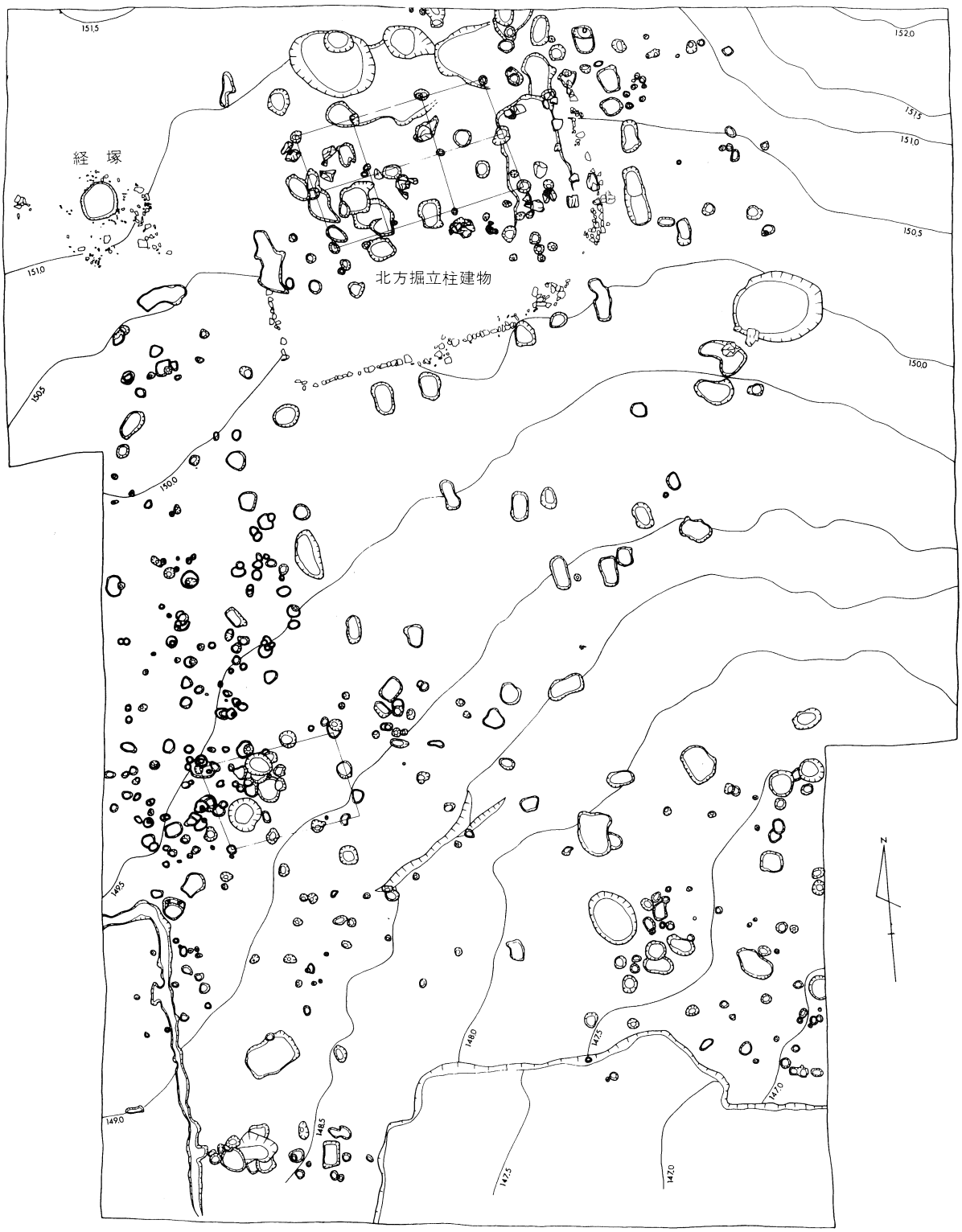


fig. 146　検出遺構平面図

fig. 147　経塚遠景

fig. 148　経塚検出状況

fig. 149　経筒埋納状況

fig. 150　経塚掘形内遺物埋納状況

掘立柱建物址

掘立柱建物址は調査区中央西側に１棟（３間×２間）、北方中央の基檀上遺構の上に１棟（３間×２間）、合計２棟検出された。

基檀状遺構の掘立柱建物址は10世紀後半から11世紀にかけての埦、皿類を中心とした土師器が集中的に出土しており、その時期の建物址と考えられる。また、基檀状遺構の東・西・南３方向には石列、石敷がみられ、更に礎石と思われる石が東方に若干残存していた。これらは、先に述べた掘立柱建物址とは同時期ではなく、瓦器を中心とした遺物を使用した時期と考えられ、13世紀前半と推定される。

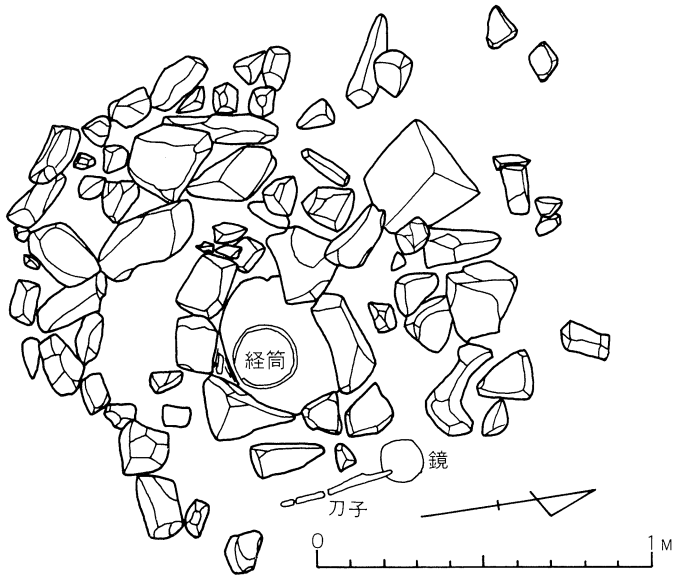


fig. 151　経塚平面図

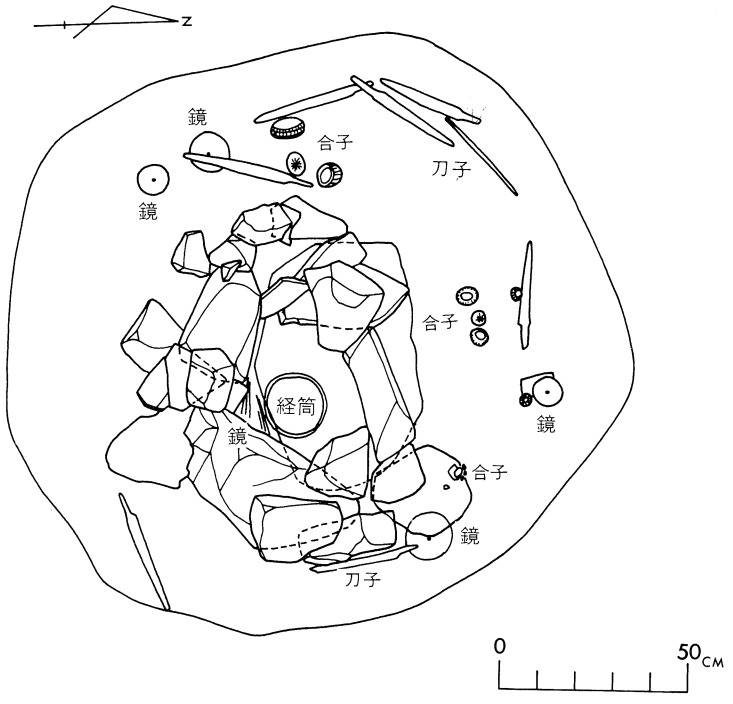


fig. 152　経塚遺物埋納位置図

fig. 153　北側掘立柱建物

火葬墓　火葬墓は合計14基検出された。平面的形状は、円形、楕円形、方形などで一定の法則性は認められないが、楕円形が主流である。

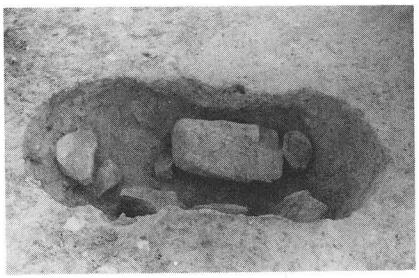


fig. 154　火葬墓3

これらの中には、火葬してそのまま埋葬するものと、火葬された骨を別の土坑に移し埋葬したものに大別できる。また、火葬墓の中から、多量の鉄釘が出土するものもある。これら火葬墓の営まれた時期は、調査区南で出土した一石五輪塔と同時期の室町時代と考えられる。

3．出土遺物

経塚からは、和鏡11、青白磁合子５個体、白磁合子１個体、鉄製刀子８、経筒（陶製）１、独鈷杵１が出土している。

経塚出土遺物　また、栗石の間から崇寧重宝１、鍍金飾り金具１が出土している。

和鏡　和鏡11面のうち、掘形西方出土の１枚と、石室内出土の南端２面は和紙で包んで埋納されていたと考えられ、表面に和紙の残片が付着していた。また、石室内出土北方から２枚目の和鏡表面には、「女……」と針書があるが、未処理のため詳細は不明である。

青白磁合子　青白磁合子は全部で５個体あるが、そのうち１個体分には蓋がない。また、２個体分は壺形合子である。これらの合子は中国龍泉窯系の製品であろうと考えられる。

白磁合子　形態的には壺形であるが、胴部に４条のヘラによる縦線がみられ、「ウリ」形と呼ばれるものである。蓋は、回転台による簡単な調整のものである。この合子は中国景徳鎮窯系の製品であろうと考えられる。

刀子　刀子は掘形東方１、南方１、西方５、北方１、計８本出土している。

fig. 155　和鏡

fig. 156　方鏡

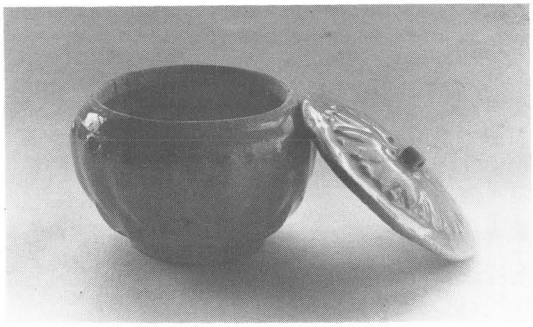


fig. 157　青白磁壺形合子

fig. 158　青白磁合子

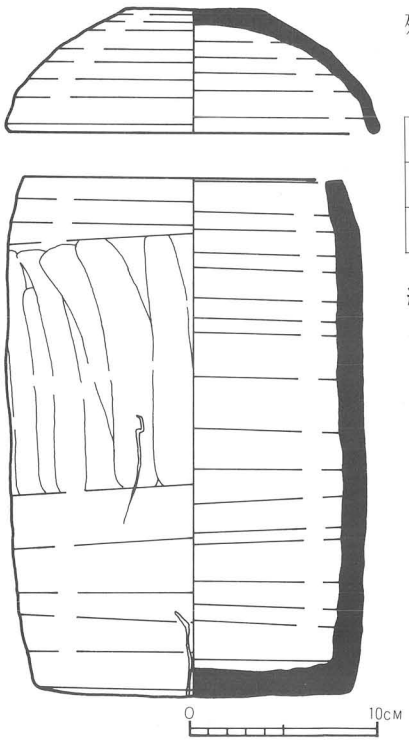


fig. 159　経筒実測図

残存状況はかなり良好で、木質が若干残っていた。

出土刀子一覧表

(cm)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8
残存長	20.2	19.1	27.0	32.2	37.65	29.2	29.45	24.3
幅	3.0	3.1	3.25	3.3	3.5	3.0	3.0	3.4

経筒　経筒、蓋ともに東播系の須恵器で、蓋は擂鉢が転用されている。経筒内には本来写経が埋納されていたと考えられるが、すでに腐蝕しており発見されなかった。独鈷杵1本が経筒内から検出された。

崇寧重宝　崇寧重宝は1102年に北宋で初鋳されたものである。

fig. 160　崇寧重宝拓影
S＝1：1

鍍金飾り金具　大きさ約4cmで、鳳凰を形どっている。この金具と崇寧重宝は栗石内から出土しており、経塚造営時のものとは断定しがたい。

他の出土遺物

出土遺物は多岐にわたり、土師器、須恵器、黒色土器、三彩系陶器、灰釉陶器、緑釉陶器、中国陶磁、瓦器、瓦、古銭、弥生式土器、鉄釘、石鏃、有茎尖頭器、五輪塔、石仏などが出土している。

土器類（土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、弥生式土器）

これらの土器類の中で、土師器が全体の約6割を占める。器種は埦・皿類など供膳用具で占められ、煮沸用具の出土量は極めて少ない。

土師器皿の底部に「布」とされた土器が一点みられるが、その文字の示す意味は今後の検討が必要である。

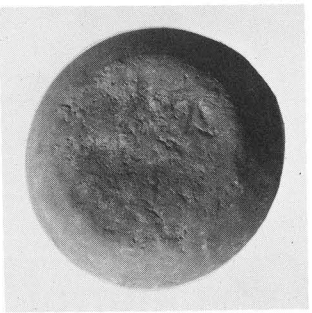


fig. 161　墨書土器「布」

出土した土器の年代は、弥生時代（弥生式土器）から鎌倉時代（瓦器埦）に至るまでの時代にまたがっているが、その多くは10世紀後半から11世紀のものである。

陶磁器類（三彩系陶器、灰釉陶器、緑釉陶器、中国陶磁）

これら陶磁器類は全体の出土遺物のうち1割程度である。それはこうした遺物が高価で特殊なものであり、特別の場合のみ使用したものであるためである。特に灰釉陶器の花瓶は愛知県猿投窯産のもので、現在までに奈良・薬師寺西僧坊址、名古屋・八事一堂址、岐阜・北丘古窯址群の3例が発見されていたが今回が4例目である。この4例の中で、胴部に陰刻花文を施したものは本例のみである。

陶磁器類も土器同様10世紀から12世紀にかけてのものが、その主体をなす。

金属製品

古銭　17種33枚出土している。そのうち皇朝十二銭6、北宋銭15と平安・鎌倉期の古銭が大多数を占めている。

鉄釘　鉄釘は主に火葬墓から山土している。これらは細かく割れ腐蝕しているため、一つ

古銭一覧表

種　類	初鋳	時　期	出土枚数
隆平永宝	796	平　安	2
富寿神宝	818	〃	1
長年大宝	848	〃	3
大平通宝	976	北　宋	1
至道元宝	995	〃	1
景徳元宝	1004	〃	1
天禧通宝	1017	〃	1
皇宋通宝	1039	〃	1
治平元宝	1064	〃	2
熙寧元宝	1068	〃	4
元祐通宝	1086	〃	1
崇寧重宝	1102	〃	1
大観通宝	1107	〃	1
政和通宝	1111	〃	1
洪武通宝	1368	明	1
永楽通宝	1403	〃	3
寛永通宝	1636	江　戸	1
不　明			7
計			33

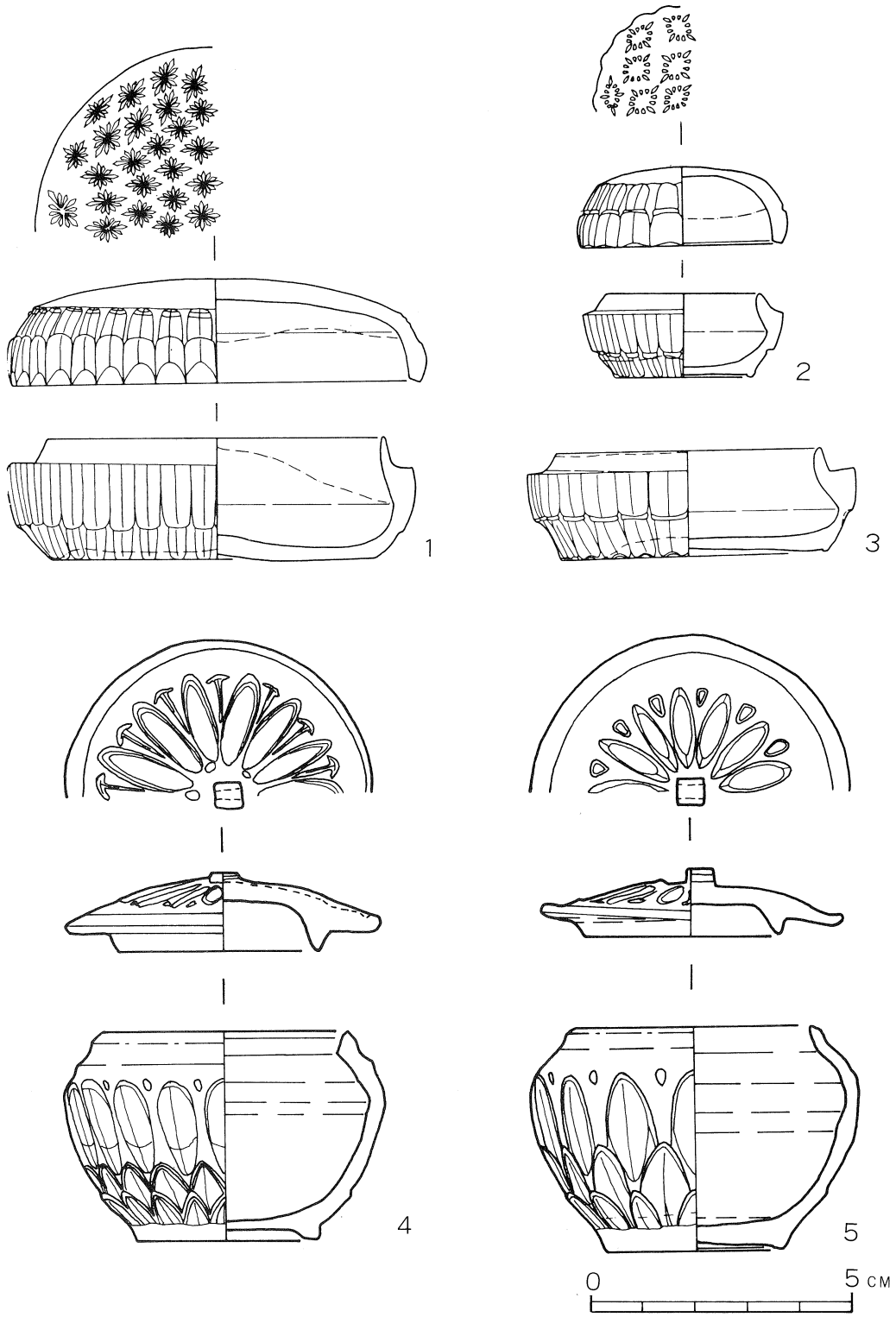


fig. 162 経塚出土青白磁合子実測図

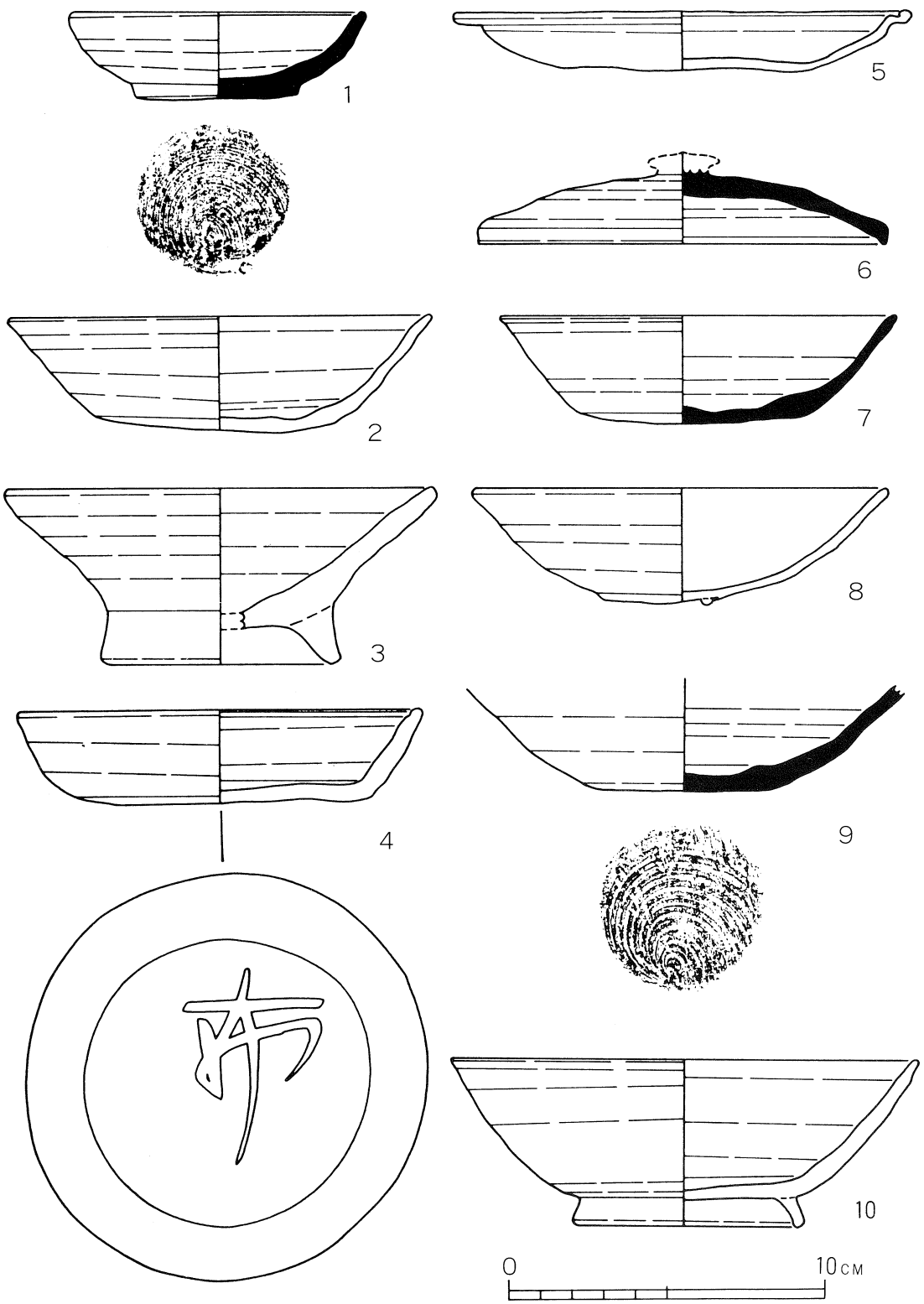


fig. 163　出土遺物実測図　1、6、7、9 須恵器、2～5、10 土師器、8 瓦器

の木棺に何本の鉄釘が使用されていたかは不明である。

石製品（五輪塔、石仏、石鏃、有茎尖頭器）

五輪塔・石仏　一石五輪塔は、調査区南方の土坑（210×140cm）からほぼ磁北に向けて10本出土している。五輪塔は石製塔婆の一種で、約50年で魂をぬき放棄される。この一石五輪塔の他、五輪塔の宝珠１、笠１が出土している。

fig. 164　五輪塔

石鏃・有茎尖頭器　石鏃は、弥生時代のもので、サヌカイト製である。この滝ノ奥遺跡の南方の桜ケ丘遺跡Ｂ地点に弥生時代中期の遺跡があり、これら弥生時代遺物との関連が容易に想像される。

有茎尖頭器は旧石器時代最末期のもので、残存長は8.4cmを計る（サヌカイト製）。しかし、この時代の遺構は存在しなかったし、他に遺物は出土しなかった。

出土遺物のまとめ

遺物の整理は現在もなお進行中であるため、これらの評価は今後の整理・検を待つところが大きい。現在までに判明していることをまとめてみると、次のようになる。

○これらの遺物は10世紀から12世紀のものが主体である。
○供膳用具が主体で煮沸用具が少ない。これは本遺跡が通常の生活の場ではないことを示している。
○各種陶磁器類など特殊なものが多い。
○経塚遺物、五輪塔など仏教、特に密教に関連した遺物が多い。

４．小　結

遺物のまとめのところでも若干触れたが、この滝ノ奥遺跡は密教寺院の一部で、10世紀にその起源が求められる。その寺院は13世紀前半まで存続していたが、その後放棄されたのであろう。室町時代になって再度墓地として利用されたと考えられる。

この滝ノ奥遺跡の付近が単独で寺院であったとは考えがたいが、実際にどんな寺院なのか、今後充分に検討する必要があろう。

19. 史跡処女塚古墳（しせきおとめづか）

1．調査経過　史跡処女塚古墳の整備事業は、昭和54年度に着手した。整備工事に先だって墳丘の形態、規模を明らかにするためのトレンチ調査を実施した結果、(1)前方後円形の古墳である可能性が高い (2)前方部は２段築成である　(3)墳丘斜面に葺石が存在することが判明した。

しかし、この調査で得られた成果では、墳丘整備を行うには資料的に不充分であった。そのため今年度も墳形、規模、段築などを明らかにすることを目的として調査を実施した。

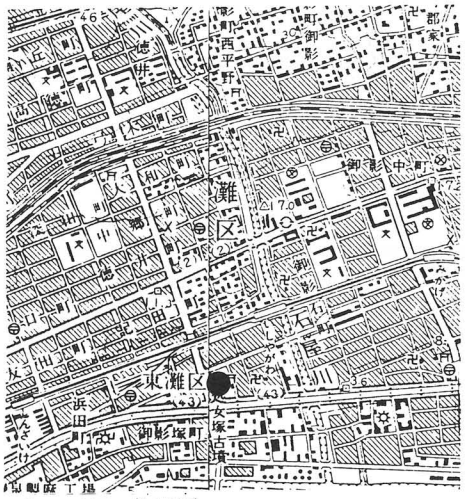


fig. 165　位置図

2．調査方法　後方部には､幅１ｍの主軸に直交するトレンチと45°で交わるトレンチを設定し、基底部とくびれ部の前方部側については、排土置場の許す限り調査面積を拡大した。

3．立　地　これまで当古墳は、洪積台地に立地すると推測されていたが、地山のたち割調査の結果、砂堆状地に立地していることが確認された。また、古墳北側で給油所が建設された際の断面観察結果では、地表下3.5ｍ付近にアカホヤ火山灰があり、間層に種々の砂層が堆積していた。

古墳の築造方法は、砂層面から直接盛土を施したものではなく、30～50cmの黒色粘土を敷き、その上に盛土を行なっている。黒色粘土面は、北から南にゆるやかに傾斜しており、古墳築造当時の地山面の影響を受けたものと考えられる。

黒色粘土面の標高は10ｍ前後を計り、現在の海岸線までの距離は 300 ｍ程度で、当古墳の低位性が指摘できる。

4．調査概要　墳丘基底部と段築面を追求するため、15本のトレンチを設定して調査した。その結果、墳頂平坦面から墳丘斜面にかかる変換点（第２、第３トレンチ）、段築面（第11、第12、第13トレンチ）、墳丘基底部（第８、第15トレンチ）が確認され、箱式石棺（第９トレンチ）、主体部と推定される石組遺構（第12トレンチ）、石敷遺構（第11、第12、第13トレンチ）が検出された。

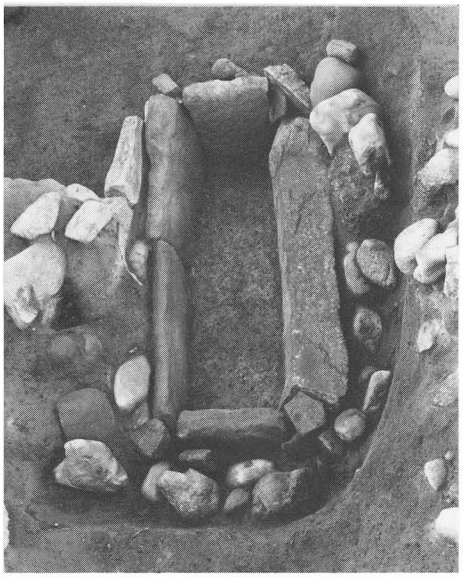
箱式石棺　箱式石棺は段築面に掘形を設け、内法長92cm、幅は北側26cm南側17cm、蓋石から床面までは約17cmを計る。遺物は蓋石の直上から滑石製の勾玉１個（深

fig. 166　トレンチ設定図

緑色）と掘形内からスタンプ文埴輪の小片が１点出土している。石棺内部はすでに流土（茶褐色砂泥）が充満しており、副葬品・骨等は出土していない。石棺の石材は、花崗岩と凝灰質砂岩である。蓋石は南から順に北に向ってかけられている。南小口板は側板の内側に入り、北小口板は東側を側板の内側に入れ、西側を側板の外に出している。掘形内には花崗岩の円礫を充満させている。この箱式石棺は、段築面を削って構築されていること、スタンプ文土器の破片を掘形内に含んでいることから追葬と考えられる。その時期を確定させる材料は検出されなかったが、勾玉の形態などから考えて、古墳構築終了時からさほど遠くない時期と思われる。

fig. 167
箱式石棺

検出状況



完掘後

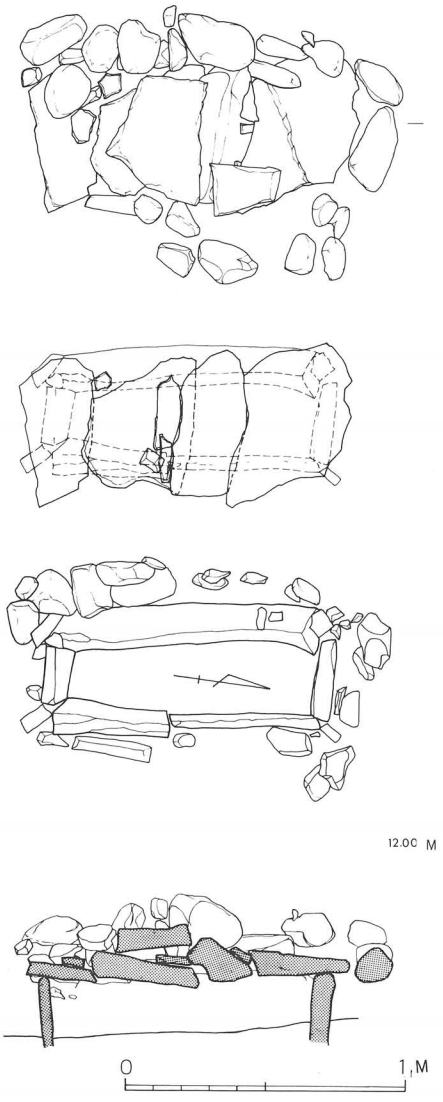


fig. 168　箱式石棺実測図

石敷遺構　前方部墳頂部で検出された。その範囲は、標高13.75 m付近から南の前方部端まで及んでいる。墳頂平坦面から東側の墳丘斜面にかけて、石敷は連続性が認められる。石敷の石材は花崗岩円礫であるが、葺石に比べ若干小さい。

fig. 169　前方部石敷遺構実測図

fig. 170　石敷遺構（南から）

墳　形　前回の調査では、墳形は前方後円形と考えられていたが、今回の調査によって前方後方墳の可能性が極めて高くなった。特に第８トレンチの平面形から後円墳の可能性はほとんどなく、現況の等高線が描く形からもそれが妥当であることを示している。

前方後円墳の中にも後円部が正円でなく「倒卵形」をしている古墳が若干例存在しているが、処女塚古墳も奈良県新山古墳同様に変形の後方部をもつ古墳と考えられる。

段　築　今回の調査においても、数ヶ所の段築面が確認された。まず、前方部南側標高12ｍのところで１段検出された。段幅は約1.2ｍである。前方部東側斜面で１段検出された。段は、前方部中央からくびれ部、前方部端の双方に向けて徐々に高くなっている。西側斜面は、くびれ部の標高11.50ｍ付近に段築面と考えられる部分がある。

以上の結果から考えて、東西の段築面レベルが約11.50ｍであるのに対して、前方部端の段築面レベルが約12.0ｍであることから、段築面がゆるやかな傾斜をもっていることがわかる。

５．出土遺物

土師器、スタンプ文土器は、前回と同じく両くびれ部付近に集中する傾向がある。特に第11トレンチから多量の遺物が出土した。前方部端段築面（第13トレンチ）では、スタンプ文土器が一括出土している。

スタンプ文土器　スタンプ文土器には完形品はなく、総て破片であった。しかし、図上である程度形態復元が可能である。器形は二重口縁の壺形で、器壁は厚く、内外面共に刷毛目調整を加えている。口縁部に２～３段、肩部にも３段以上の半截竹管による円形スタンプ文を施文している。スタンプ文には、円形のほかにＳ字形のものもある。

二重口縁壺　非常に器壁の薄い底部穿孔の二重口縁壺が一個体、第11トレンチから出土している。内面全体にていねいにヘラ削り調整を施している。

勾　玉　箱式石棺の蓋石直上から出土した勾玉は、先にも述べたように滑石製で、片方から穿孔し、調整は両方から行っている。

他に攪乱、流土中から弥生土器・古式土師器が若干出土しているが、これらは墳丘盛土に含まれているものと考えられる。

６．まとめ

今回の調査によって、墳形は前方後方墳の可能性が極めて高いという結論を得た。しかし、完全な復元ライィンを確定するには、まだ資料が不十分な状態にある。

供献土器と思われるスタンプ文土器・底部穿孔の二重口縁壺形土器は、くびれ部付近の墳頂部と前方部端段築面に若干数配置されていたと推定される。

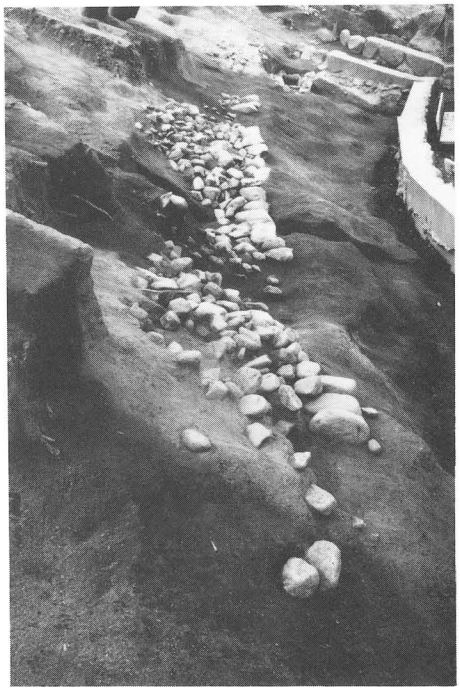


fig. 171　前方部東側根石列（南から）

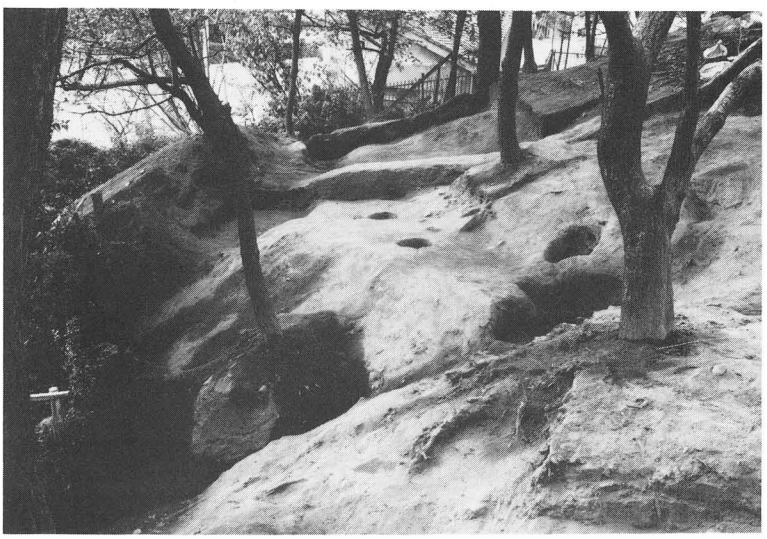
fig. 172　後方部西側裾（南から）

fig. 173　前方部東側根石列実測図

fig. 174 前方部東側斜面
（北から）

fig. 175 前方部東側根石列
（東から）

fig. 176 後方部西側テラス
（南から）



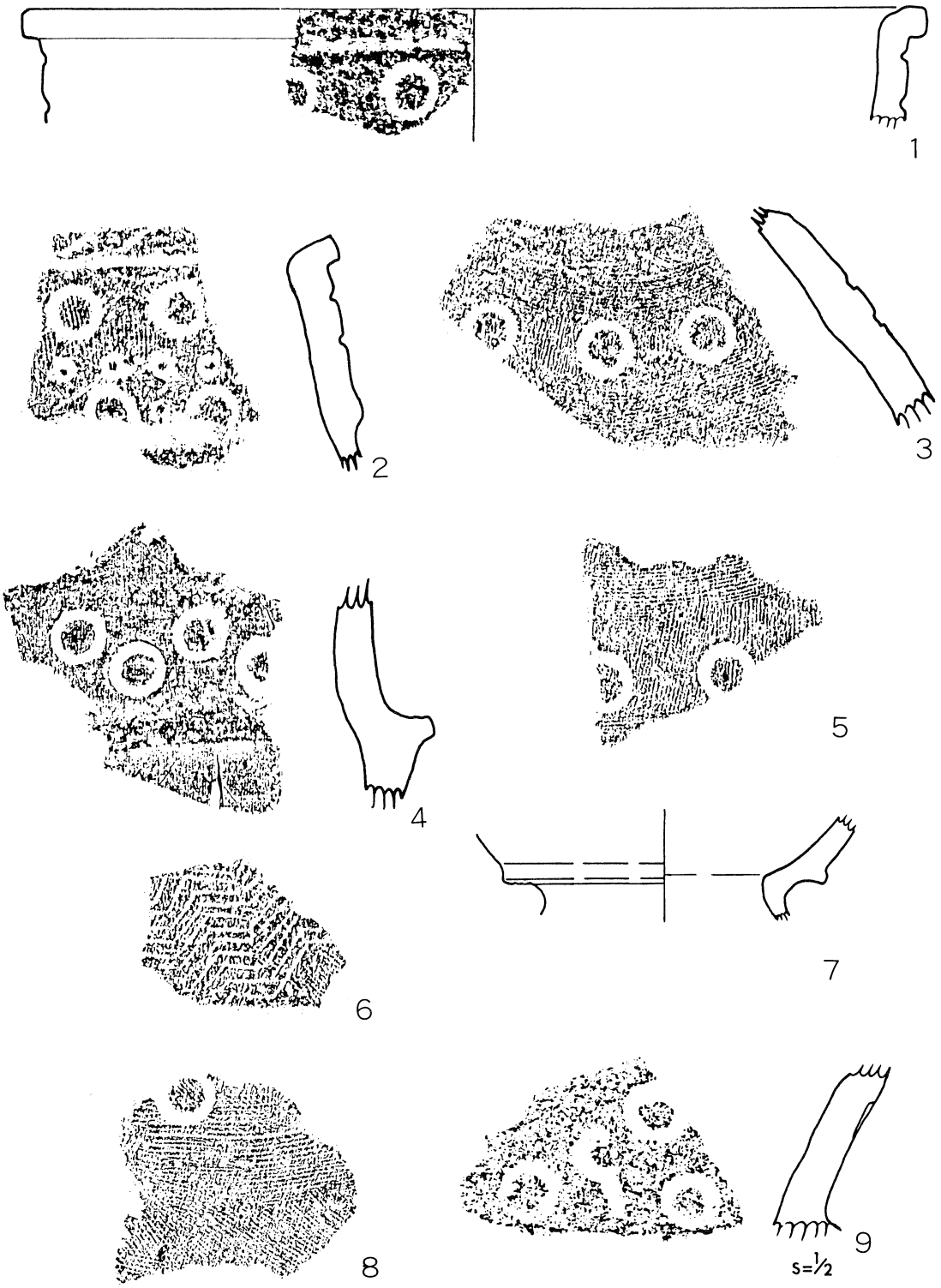


fig. 177　出土遺物実測図及び拓影　1～6、8、9 埴輪　7、鼓形器台　　S＝½

20. 郡家中町（ぐんげなかまち）遺跡

1．はじめに　昭和53年度に今回の対象地の北約500ｍの郡家大蔵遺跡で発掘調査が実施され、その結果、奈良時代を中心とする複合遺跡の存在が確認された。さらに今回の調査地東隣の東灘警察署内では、かつて奈良時代の遺物が出土しており、この遺跡の広がりは阪急神戸線～国道２号線の間であろうと考えられる。遺跡の性格については郡家という地名の残存から、奈良時代の郡衙推定地とされている。郡家大蔵遺跡の下層では、弥生時代中期の遺物・遺構の存在も確認されている。

fig. 178　位置図

2．調査経過　工事中の不時発見により発掘調査を実施した。工事面積の約⅔はすでに掘削が行われており、調査対象面積は約121㎡であった。

3．調査概要　遺構面は４面確認した。

第１面では、鎌倉時代の水田面と柱穴及び溝を検出した。

第２面では、奈良時代～平安時代の柱穴群を検出した。特に遺物では須恵器・土師器とともに緑釉片も数点出土しており、郡衙址であった可能性が極めて高い。

第３面では、６世紀後半の柱穴群並びに祭祀に関係していたと思われる土坑を検出した。

第４面は第３面より若干遡る時期（5世紀後半前葉）の遺構面で土坑を検出した。

fig. 179　調査対象地

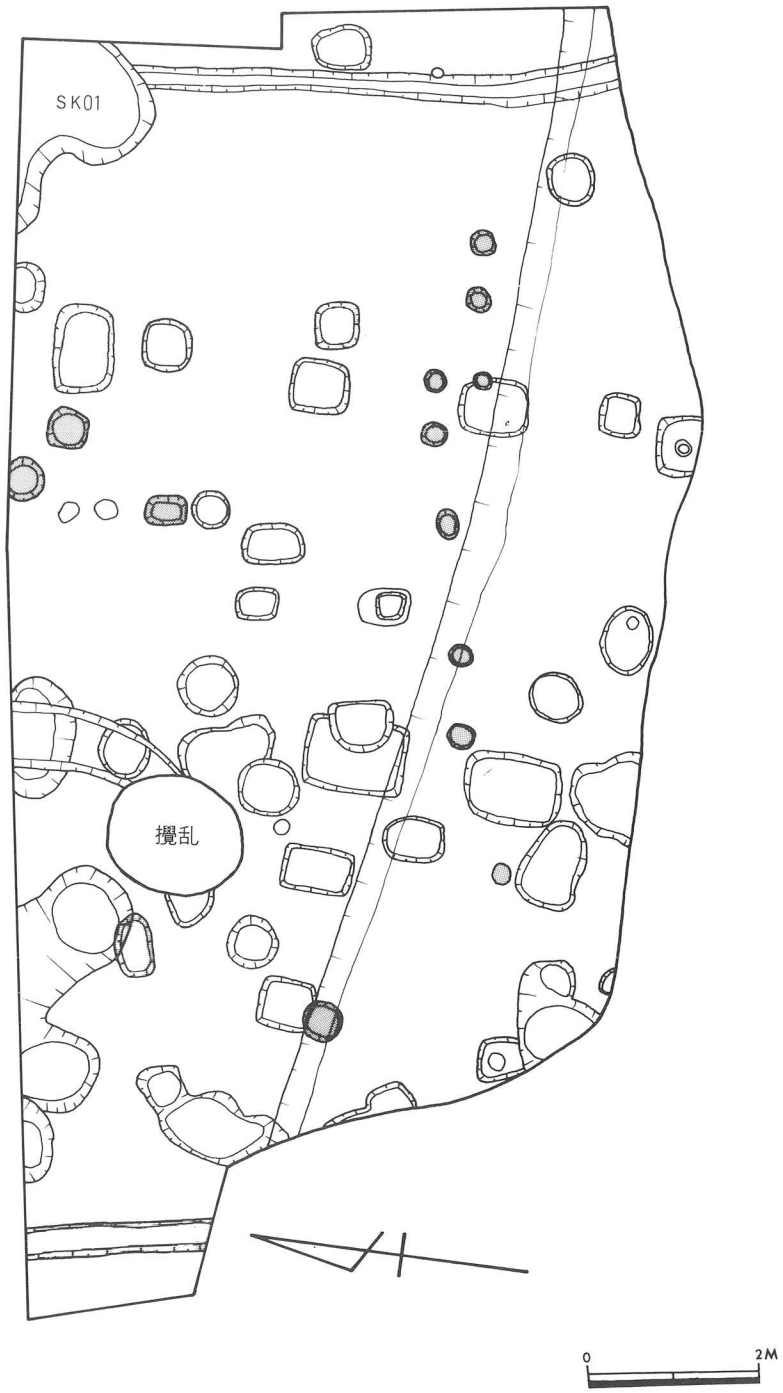


fig. 180 遺構全体図（□は奈良時代、他は古墳時代）

fig. 181　鎌倉時代遺構面

fig. 182　古墳時代遺構面

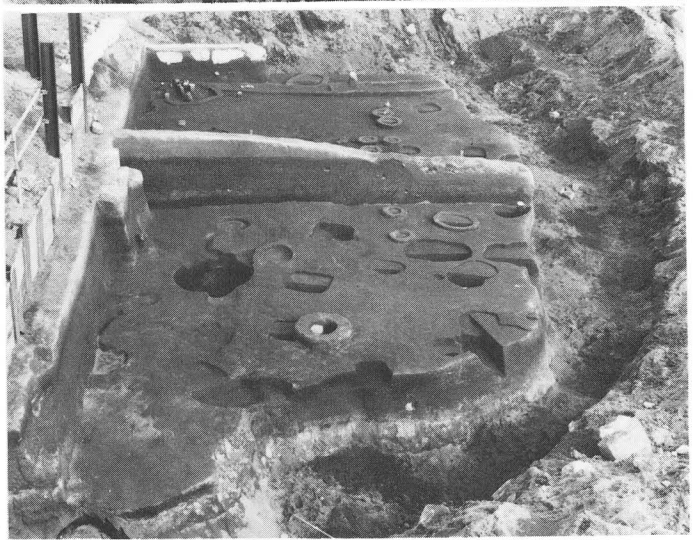


fig. 183　ＳＫ01遺物出土状況

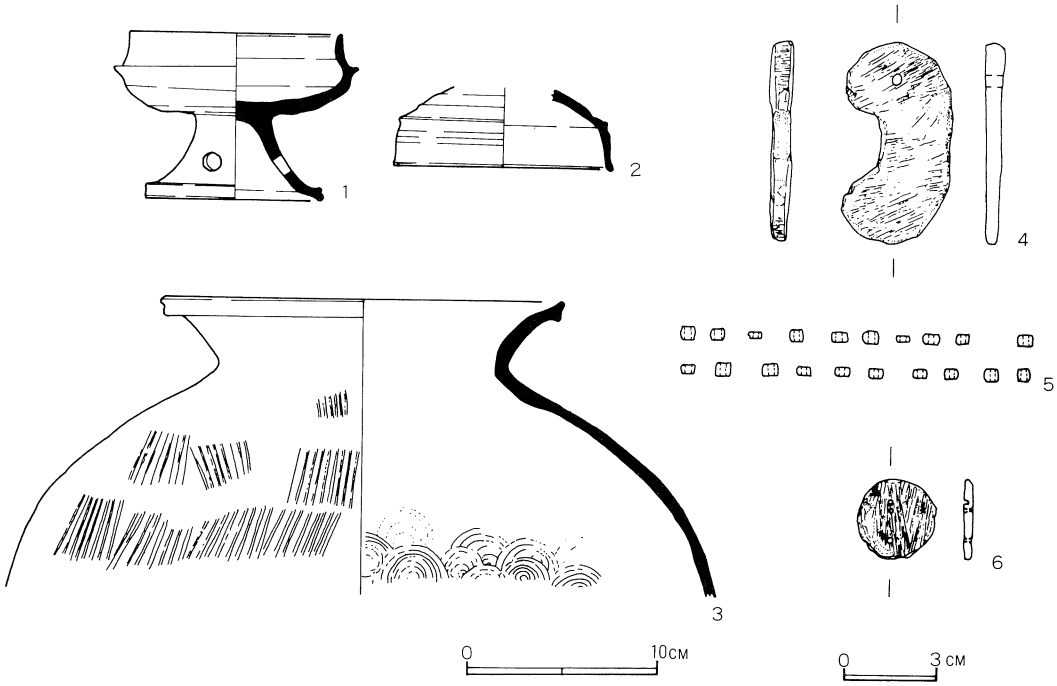


fig. 184　ＳＫ01出土遺物　1～3須恵器、4～6滑石製品（4､勾玉、5､臼玉、6､有孔円板）

４．出土遺物　奈良・平安時代の遺物としては緑釉片が数点出土しており、調査対象地が郡衙の地域に含まれる根拠として重要な意味をもっている。

古墳時代の遺物の中でも、特に５世紀代の須恵器は前回の調査で出土しておらず、今回出土の須恵器は市内でも最古に属する貴重な資料である。

また、祭祀土坑からは、須恵器有蓋高坏１、須恵器甕１、土師器甕１、土師器高坏１が出土した。須恵器坏身内から臼玉20個が出土した。さらに遺構面からは滑石製の勾玉模造品が１点出土している。土器群中の土師器坩からも滑石製の臼玉が２点出土している。臼玉には赤色と緑色の２種類がある。

５．まとめ　今回の調査は不時発見のため、調査面積も狭く、柱穴群を確認はしたが、建物址を追求することができなかった。しかし、５世紀代の祭祀土坑とその遺物については、これまで市内においての発見例が少なく、貴重な資料である。

21. 北神（ほくしん）ニュータウン（北神戸第１地区）内遺跡

１．はじめに　昭和56年度、北神ニュータウン（第１地区）内の埋蔵文化財調査は、５地点の発掘調査を行い、そのうち２地点の石室移築保存作業を行った。

今回発掘調査を実施した地点は第46地点遺跡、第47地点遺跡、第10地点遺跡、第36地点遺跡、第19地点遺跡である。また、石室を移築し保存することとなった第35地点の横穴式石室、第13地点の竪穴式石室の仮移築の作業を行った。

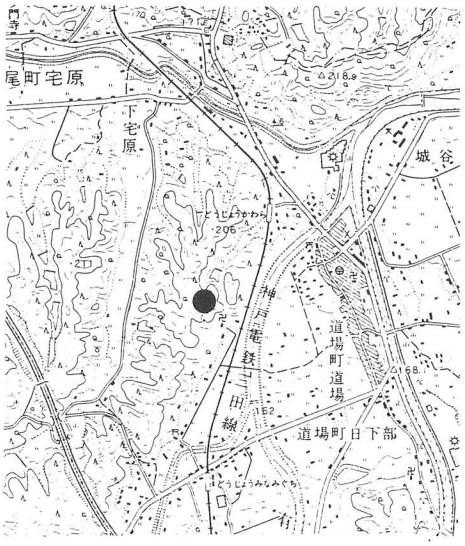


fig. 185　位置図

２．調査概要　第46地点遺跡

第13地点から南へ延びる尾根の斜面と谷にかけての範囲が第46地点である。

火葬墓　ここから30基におよぶ火葬墓が発見された。各火葬墓は、それぞれ若干の規模の差はあるが、隅円の長方形又は楕円形を呈している。いずれも長さ1.0～1.5ｍ、幅0.5～1.0ｍ、深さ0.5ｍ前後の土坑で、1基を除くすべてに焼けた痕跡がみられた。土坑内からは、焼土、炭、人骨片、鉄釘が出土し、土坑底には棺台に使用したと考えられる石が置かれているものもある。副葬品は、非常に少なく、古銭、土師器坏皿、陶器坏皿が出土しているだけである。古銭には、「永楽通宝」、「寛永通宝」がみられる。棺については、鉄釘の使用から箱形であったとも推定できるが、土坑規模が小さいなど問題もあり明らかでない。

火葬墓群の形成時期は、出土遺物から、江戸時代頃と考えられる。なお、火葬墓群のなかに長さ5ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.15ｍの溝が検出され、溝内から鉄鎌２点が出土している。この溝と火葬墓群との関係については、明らかでない。

第47地点遺跡

第46地点の南に延びる尾根上に位置する。今回は、遺跡確認調査を行い、火葬墓１基を検出した。地形にあわせ、幅1.5ｍ、長さ23ｍと8ｍのトレンチをＴ字形に設定して試掘調査を行った。その結果、トレンチの西端付近で、土坑１ケ所が検出された。土坑は、1.0ｍ×0.8ｍの楕円形を呈し、土坑内には、焼土、炭、骨片がみられ、火葬墓と推定される。時期を決定する遺物がないため、不明であるが、火葬墓の形状から第46地点遺跡と同様の時期と考えられる。今回

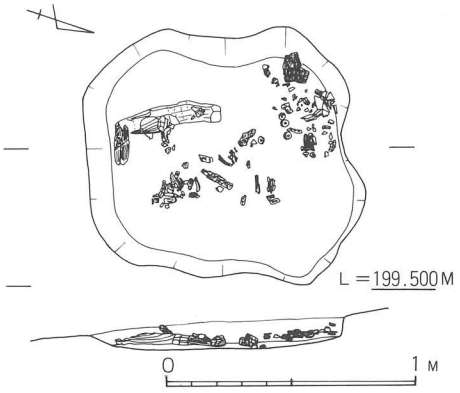


fig. 186　第46地点14号火葬墓実測図

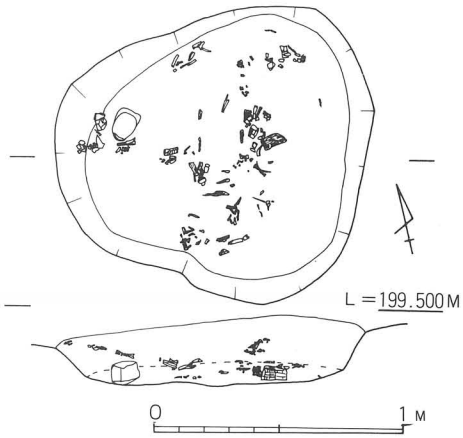
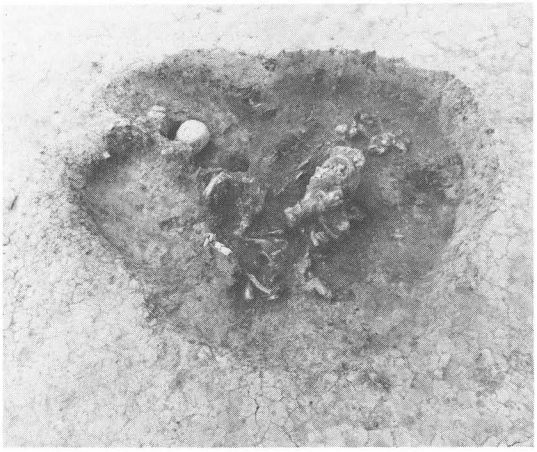


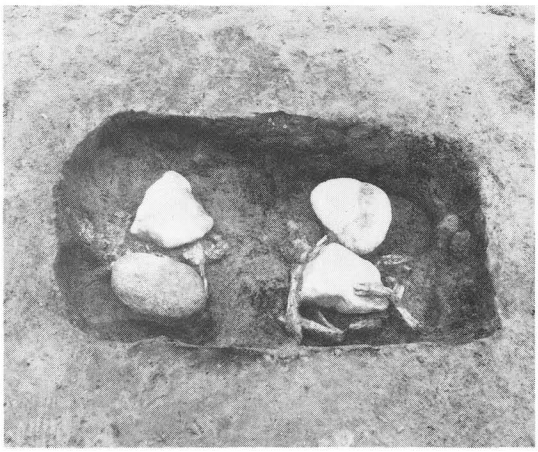
fig. 187　第46地点16号火葬墓実測図

1.　6-1、2号墓

2.　14号墓



3.　16号墓



4.　28号墓

fig. 188　第46地点火葬墓

の試掘調査の結果から、第47地点は今後本格調査が必要である。

第36地点遺跡

第35地点と第13地点の古墳の間に位置し、西へのびる尾根上最頂部付近の標高211.0～211.5ｍの平坦面に立地する。工事中に発見されたため、一部はすでに削平されていたが、３基の火葬墓が検出された。

１号墓、３号墓は保存状態がよく、木炭、人骨片が残在していた。１号墓は、棺台に使用したとみられる30～50cm大の角礫が６個検出され、いずれも火を受けた痕跡が確認された。出土遺物は、木炭・人骨片のほかは、３号墓か

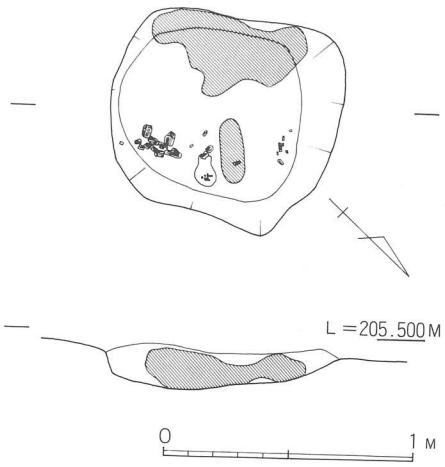


fig. 189　第47地点火葬墓実測図

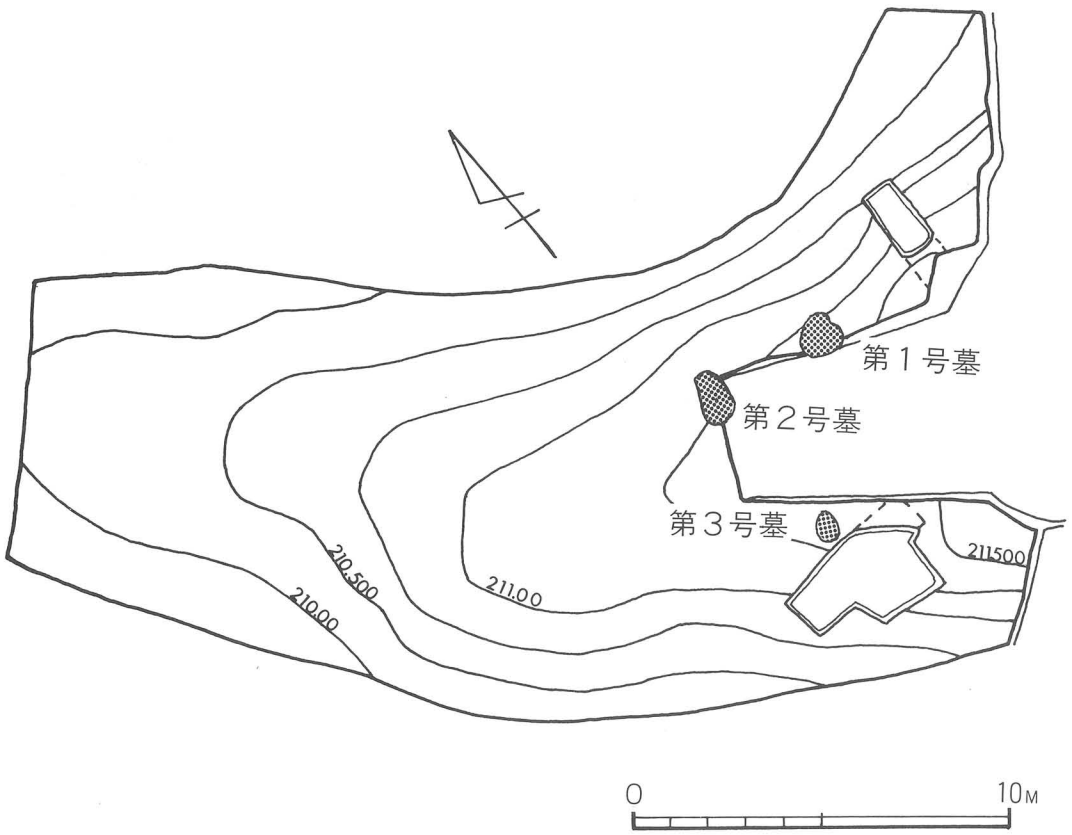


fig. 190　第36地点遺跡地形実測図

fig. 191 第36地点遺跡全景

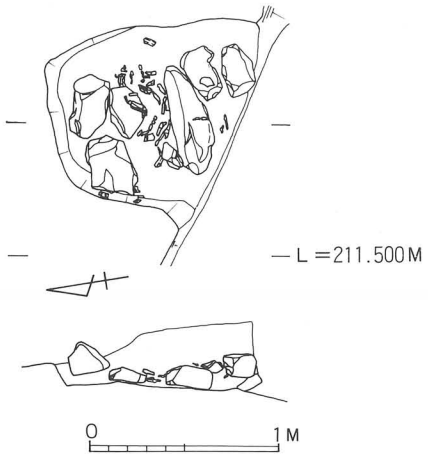


fig. 192 第36地点1号墓実測図

fig. 193 第36地点1号墓

fig. 194 第36地点3号墓

ら出土した鉄釘片3点のみである。

時期は、第46地点で検出している火葬墓群と同様の時期（江戸時代）と考えられる。

第10地点遺跡

第35地点の東、標高約210ｍの尾根頂部に位置しており、分布調査の結果、古墳と推定されていた。

発掘調査の結果、古墳の墳丘と同様に頂部が平坦で、周溝と思われる溝を築いていることがわかった。しかし、古墳の主体部等の埋葬施設は検出されず、古墳時代の遺物（須恵器）も若干しか出土しなかった。頂部平坦面には、不整楕円形の土拡と、近世の礫石経塚が検出された。以上のように古墳については確認できなかったが、周溝を設けていることや隆起が顕著なことから、その可能性は高い。すでに墳頂部が流出したと考えられるが、主体部、盛土の認めら

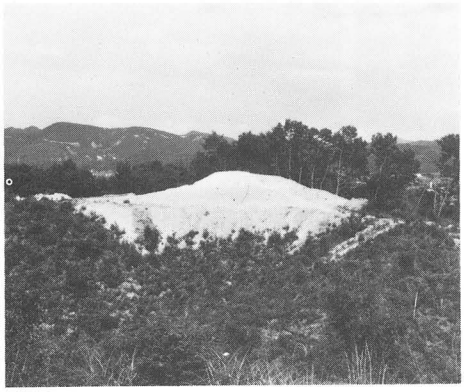


fig. 195　第10地点遠景

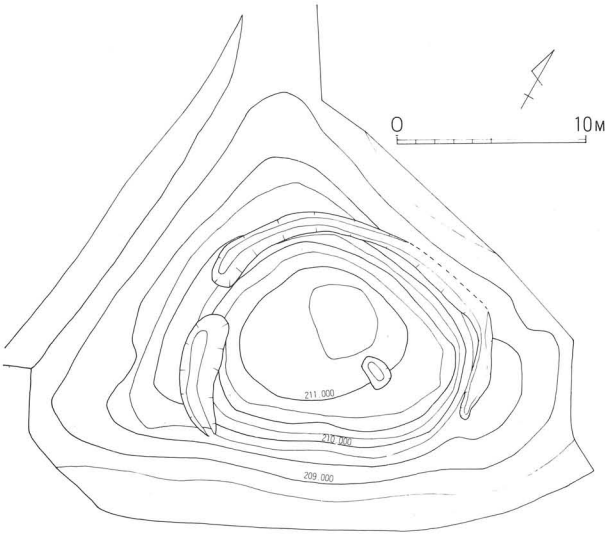


fig. 196　第10地点遺跡地形測量図

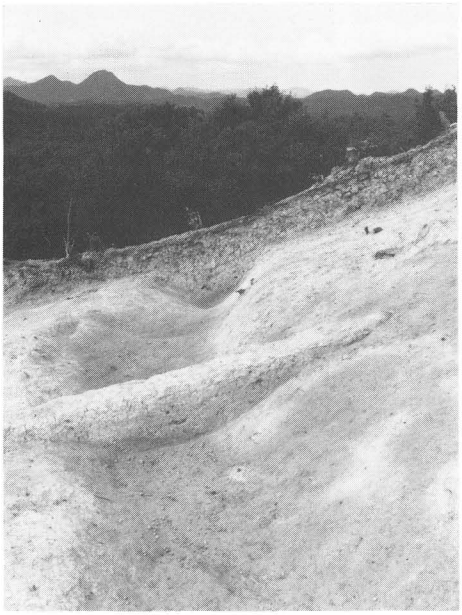


fig. 197　周溝状遺構

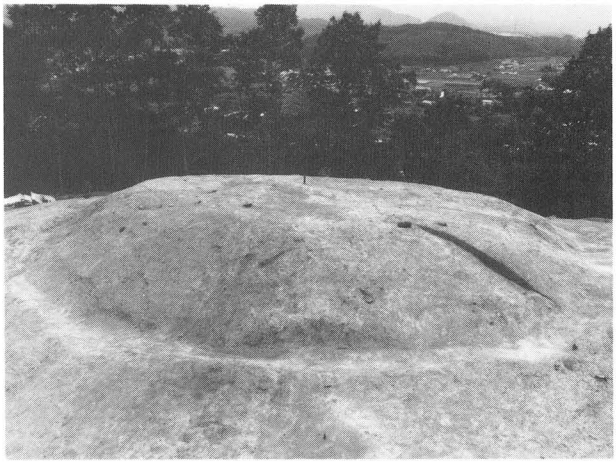


fig. 198　第10地点遺跡全景（調査後）

れない点など疑問も多い。

一字一石経　礫石経塚は、径１～２cm程の小円礫に一石につき一字を写経している。いわゆる一字一石経塚である。その構造は、30cm四方、深さ25cm（以上）の掘形を掘り、底に平瓦一枚を敷き、礫石経を納めたのち、上部に平瓦で蓋をするというものであった。写経された経典については、調査中であるが、法華経であると思われる。礫石経塚の時期については、出土遺物からは明らかではないが、類例から江戸時代中頃以降と思われる。

第19地点遺跡

北神ニュータウン区域内のもっとも南に位置する尾根頂部から、東斜面及び南側谷部の範囲で、分布調査の際に土器片（土師器）を採集している地点であ

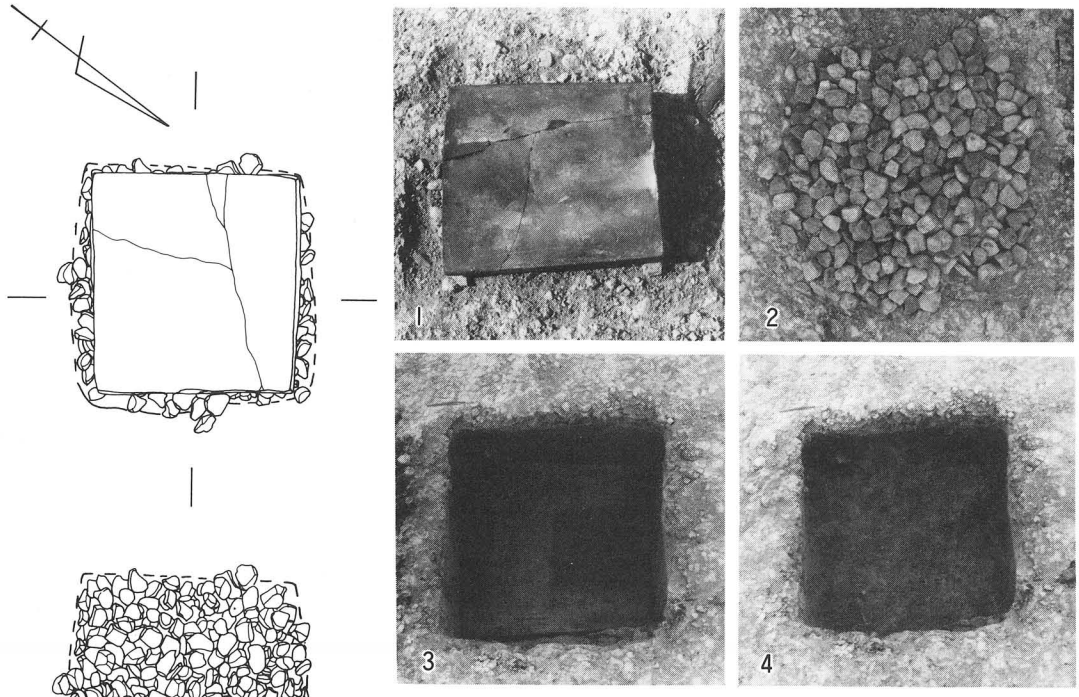


fig. 199　一字一石経　1、検出状況　2、礫石経（瓦蓋除去後）
3、掘形底（礫石除去後）　4、掘形（完掘後）

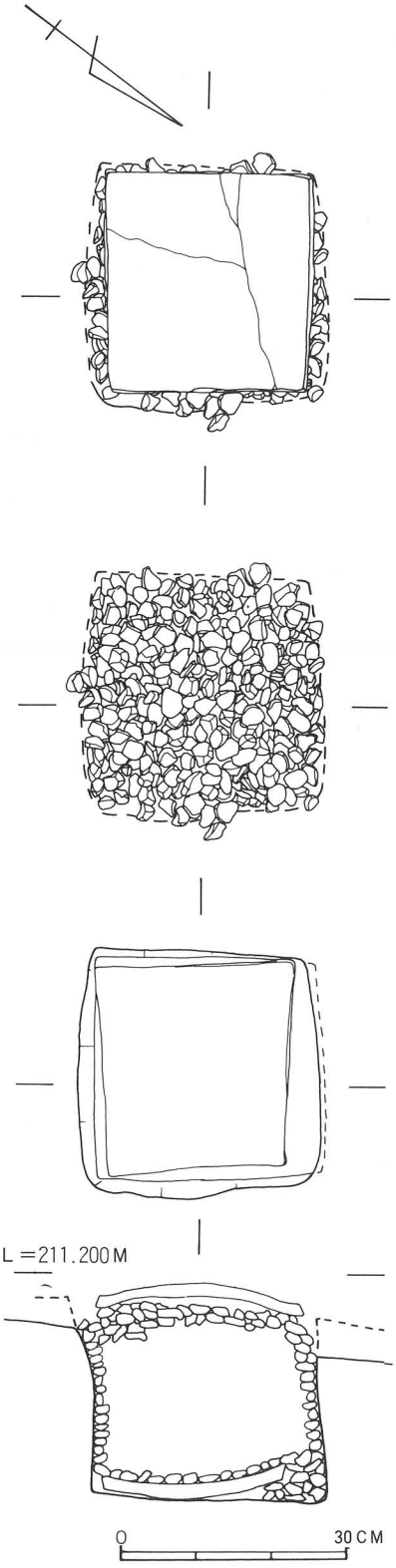


fig. 200　一字一石経実測図

る。今回試掘確認調査を行った結果、遺跡は確認できなかった。

頂部には、調査前、祠がまつられており、その下部に河原石を積み重ねてあったが、単に基礎と考えられ、下部より遺構は検出されなかった。なお、「寛永通宝」１点が流土中より出土している。

第13地点・第35地点遺跡

第13地点、第35地点の両古墳については、石室を移築保存することに決定し、第13地点の河原石積竪穴式石室については、近畿ウレタンに、第35地点の横穴式石室については、百々建設㈱にそれぞれ委託して、仮移築を完了した。

３．まとめ

以上のように、５地点の調査と２古墳の石室移築を行い、今年度の調査を完了した。第46地点については、昭和57年度も経続して調査を行う予定である。第47地点は、試掘の結果、あらたに確認された遺跡であり、今後、本調査が必要である。

22. 生野（いくの）遺跡

1．はじめに　神戸市北区道場町生野は、丹波山地南麓に武庫川が形成した山間の河岸段丘地上に立地している。川の左岸鏑射山中腹では、磨製石剣が出土しており、さらに南麓には中野古墳群が分布している。川の右岸の南から北へ伸びる丘陵の北端に、有棚石室を内部主体とする古墳を含む古墳群が存在している。また生野遺跡の北西には自彊遺跡、下田中古墳群、西方には、現在調査中の北神ニュータウン内遺跡などが存在している。

fig. 201　位置図

調査地は、三田市より南流する武庫川が大きく東へ蛇行する右岸地域で、西の丘陵から武庫川へ至る河岸段丘上にあり、西から東へ低くなる地形である。

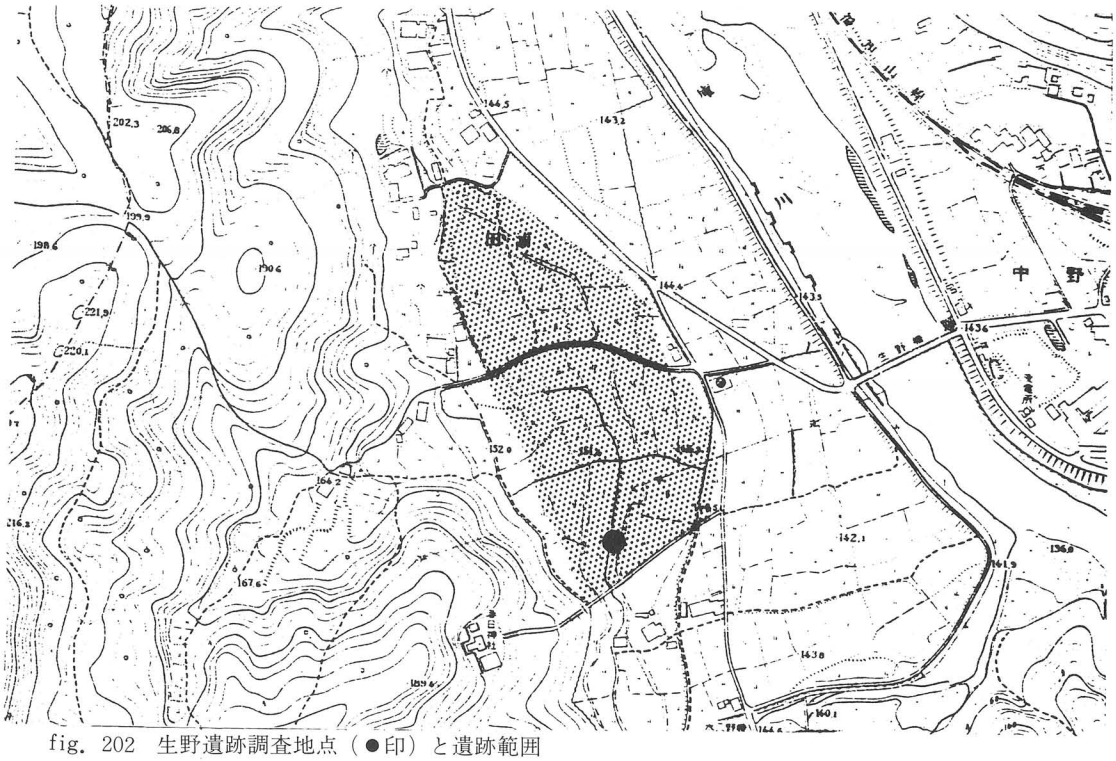


fig. 202　生野遺跡調査地点（●印）と遺跡範囲

2．調査概要　前年度の分布調査の結果に基づいてトレンチを設定した結果、遺跡の存在することが確認された。遺跡は、標高147ｍ内外の水田下にあり、南北約250ｍ、東西約70ｍの範囲にひろがっていると考えられる。

基本層序　基本層序は耕土、床土、遺物包含層、遺構検出面の地山である。

包含層出土の遺物　床土下の遺物包含層は20～30cmあり、11×22ｍで28ℓコンテナに約５箱分出土した。

出土した遺物は、旧石器時代のチャート製石核片、古墳時代(主に６Ｃ後半)須恵器坏・坏蓋・高坏・壺・甕片等である。また出土量は少ないが、奈良時代末～平安時代初にかけての土師器・須恵器片、そして鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器片が出土している。特殊なものとして、鞴(ふいご)の羽口・鉱滓・銅溶融片また白磁片・青磁片・灰釉片・土錘・梅の種子等が出土した。

鞴の羽口・鉱滓・銅溶融片は鍛冶にかかわる一連の遺物とみられるが、検出された遺構からその関連性はみとめられなかった。

白磁は、高台をもつ碗の底部が出土しており、見込みに片切り彫りがみられた。具象的な紋様ではないが、高級なものと見られる。他に青磁片が20数点出土している。

検出遺構　検出された遺構は、掘立柱建物址２・溝５・土坑８・ピット約60である。

掘立柱建物　**SB01**　２間×３間の東西棟の建物で柱間距離は、東西2.7ｍ・南北2.1ｍである。

SB02　２間×３間の南北棟の建物で、柱間距離は、東西2.1ｍ・南北2.4ｍである。

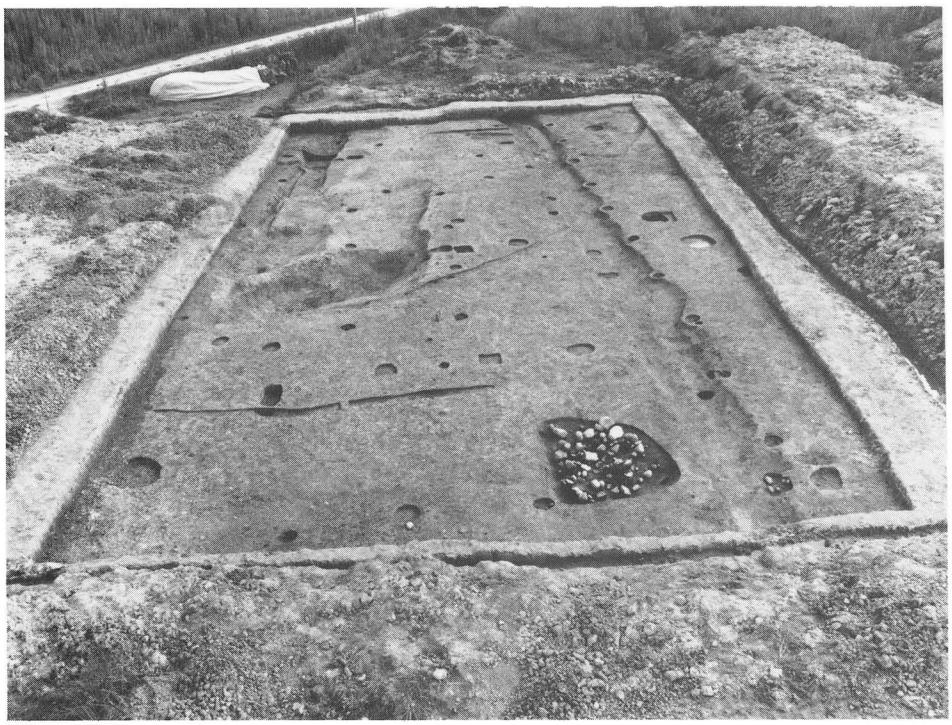


fig. 203 調査区全景（北から）

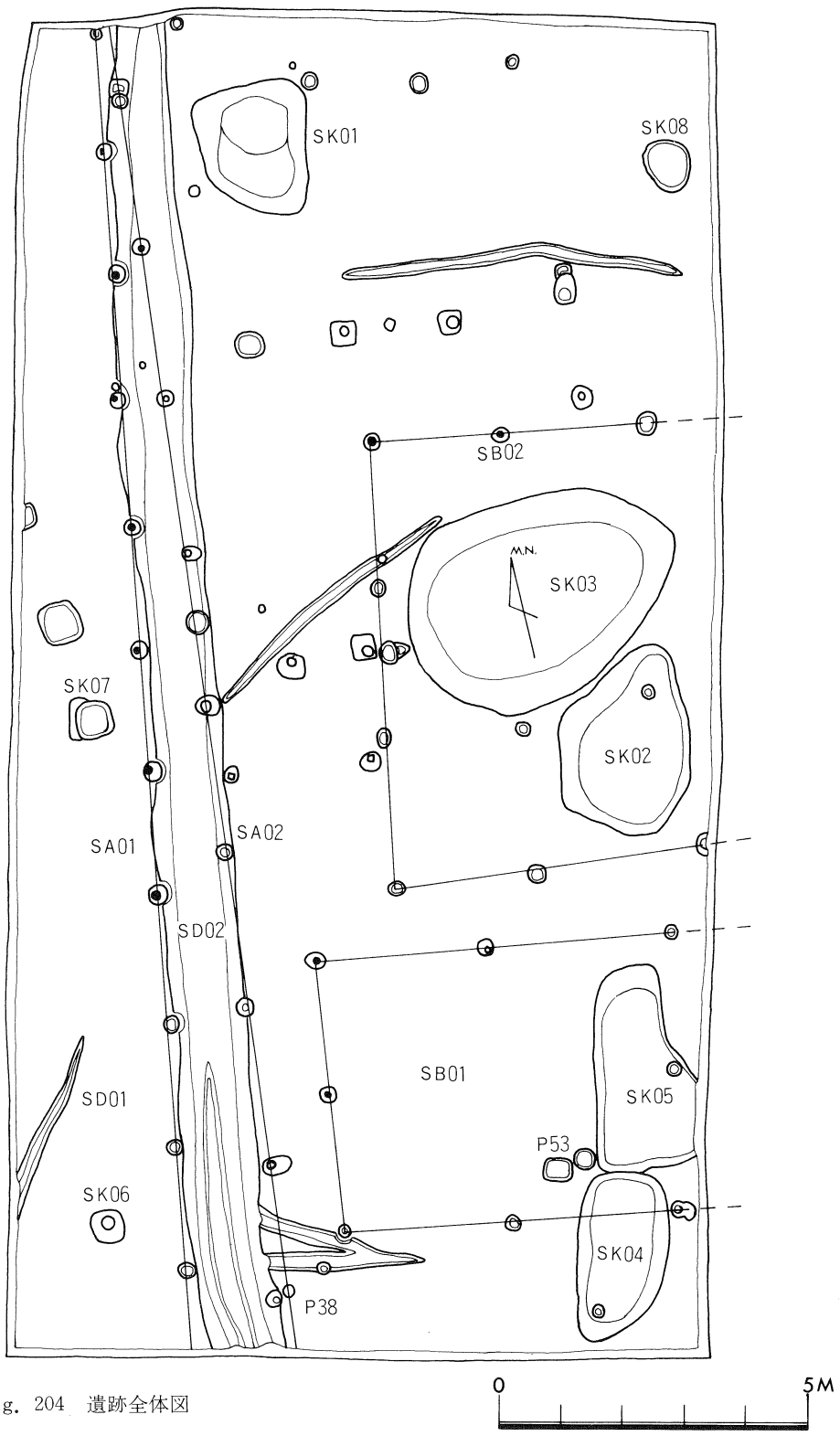


fig. 204　遺跡全体図

この２棟の建物と軸が同方向の柱列（SA01）と軸方向を異にした柱列(SA02）を検出した。

柱　列　**SA01**　柱間距離は、2.0ｍで10間分確認した。

SA02　柱間距離は、2.5ｍで８間分確認した。

ＳＡ01・02の柱穴の中には、柱が腐敗せず残存していた（柱の残存しているものは平面図柱穴内に●で標示した)。

またトレンチ北部と西部では、数か所柱穴を検出したが、建物址としてはまとまらなかった。

溝　**SD02**　トレンチ西部で、幅1.2ｍ・深さ0.2ｍの溝が南北に走っており、SA01・02と切り合っていた。SD02より鎌倉時代（12～13世紀）に属する須恵器坏等が出土した。またSA02南端のピット38（P38）からも12～13世紀に属する須恵器埦・甕片が柱を根固めする状態で出土した。溝と柱列との前後関係は、切り合い関係から、SA02が造られ次にSD02が掘られ、SD02が埋ってから、SA01が造られたと考えられる。

ＳＢ01・02とＳＡ01・ＳＤ02は同一方向の軸方向をもつことから、これらはほぼ同一時期に造られたものであると考えられる。

土　坑　土坑は、径２ｍ以上のものが５、径１ｍ内外のものが３、計８基検出された。

SK01　中からは、径20㎝前後の石と土器が廃棄された状態で出土し、埋土は有機質を含む黒色の粘質土で炭も含まれていた。

土坑内より、須恵器の坏・甕・土師器の高坏・甕・把手付堝等が出土した。これらの遺物から、奈良時代末から平安時代初頭の土坑と考えられる。

SK02・03　埋土はSK01と同様、有機質を多く含んだ土で、SK03より奈良時代末から平安時代初頭の須恵器坏が出土した。また梅の種子・板材なども出土

fig. 205　溝ＳＤ02（北から）

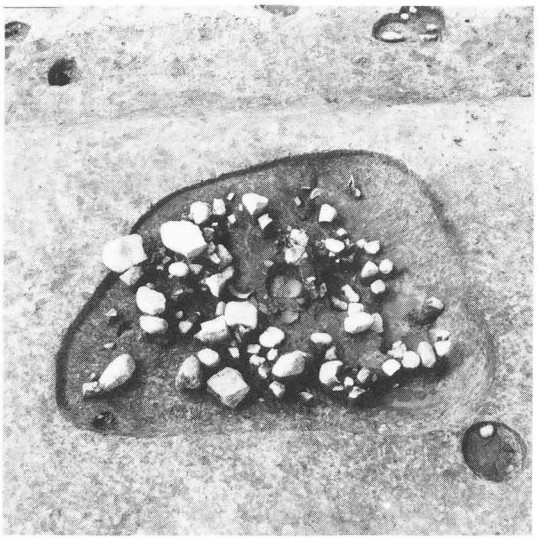


fig. 206　ＳＫ01（東から）

した。

SK04・05　SK01～03と同様の埋土がみられ、奈良時代末～平安時代初頭と考えられる須恵器坏が出土した。

SK01～05は埋土の状況、形態からみて当時のゴミ捨て穴ではないかと考えられる。

SK06～08　径1m内外の土坑で、遺物等が少なく性格づけは困難である。

ピット　**P53**　他に古墳時代後期のピット（P53）が検出され、ピット内から須恵器坏身が1個体出土した。遺構の性格は不明である。

3．まとめ

今回調査した遺構の時期は、出土した遺物等から、P53は古墳時代後期（6C後半）、またSK01～05は、奈良時代末から平安時代初頭、SB01・02、SD02、SA01・02は、鎌倉時代に属すると考えられる。以上のように大きくわけて3時期の遺構・遺物が検出された。

鎌倉時代に属する柱列の性格は、柵又は塀のような構造物と考えられる。

また包含層より鞴の羽口・鉱滓・銅溶融片等の出土が見られ、鍛冶を行う集団の生活址が存在していた可能性がある。包含層から出土した瓦器埦については、その産地は確定できないが武庫川水系を利用した搬入品とみられる。

以上、今回検出した遺構・遺物から、生野遺跡は、古墳時代後期、奈良・平安時代、鎌倉時代の遺構が存在する複合遺跡であることが明らかとなった。

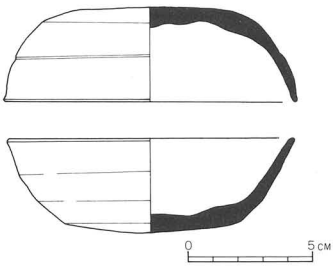


fig. 207　SK02出土須恵器実測図

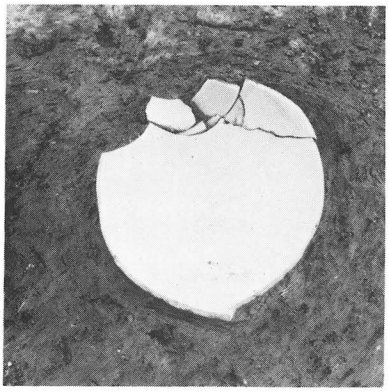


fig. 208 白磁碗出土状況

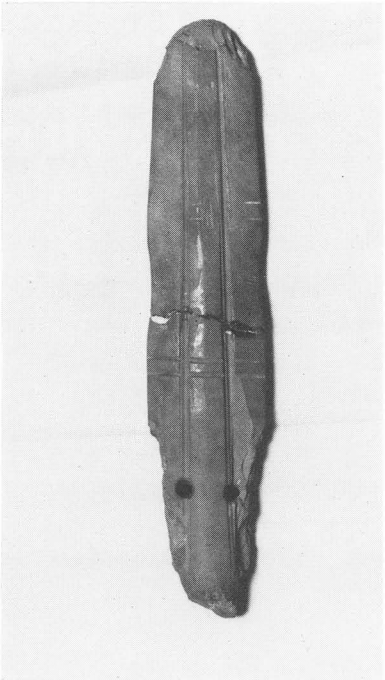


fig. 209 鏑射山出土磨製石剣
（鏑射寺蔵）

23. 塩田（しおだ）遺跡

1．調査経過　神戸市北区道場町塩田・平田地区の圃場整備事業が昭和56年度から施工されるにあたり、それに先立ち、前年度実施した分布調査の結果をもとに、昭和56年12月から同地区の試掘調査を実施した。

2．調査概要　調査対象地区は新池の南にあたる地区で、条里制地割の痕跡が水路、あるいは道路として残存している。ここに機械力を併用しながら２ｍ×２ｍの試掘坑を27ヶ所設定して調査した。その結果、No.15～No.20とNo.37～No.40の試掘坑では、耕土・床土の下に、粘質土と砂との交互堆積がみられ、有馬川の氾濫の影響がここまで及んでいることが明らかとなった。

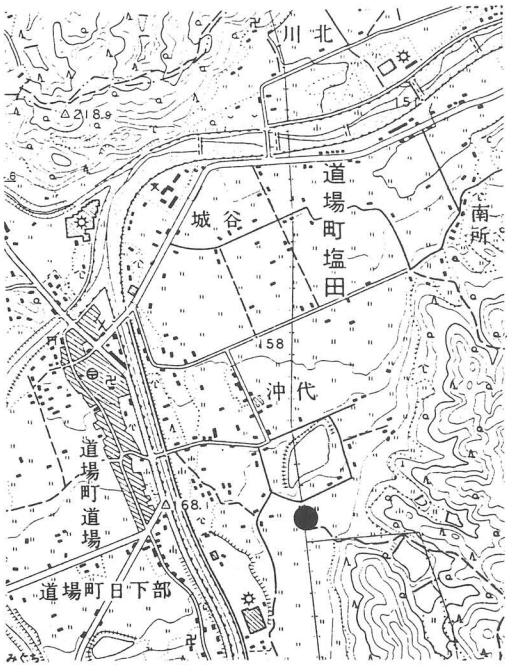


fig. 210　位置図

暗灰色粘質土、灰褐色粘質土からは、二次堆積した遺物が出土している。遺構面は検出されなかった。

一方、No.21～No.36の試掘坑では耕作土、床土を除去すると灰色粘質土、灰褐

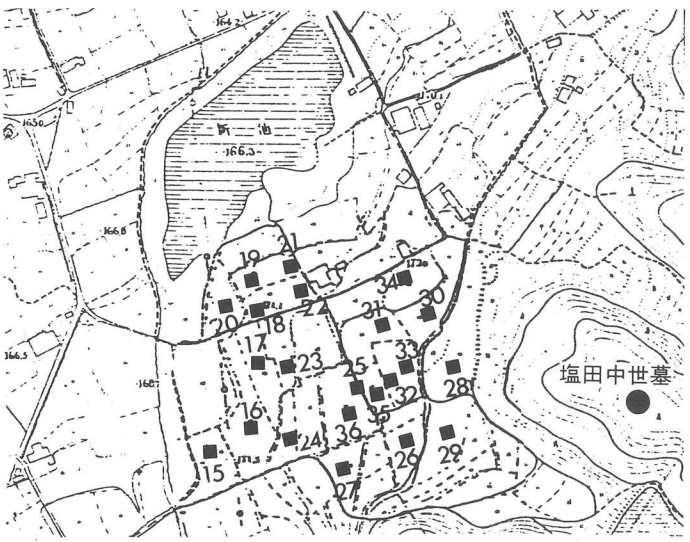


fig. 211　トレンチ設定図

色粘質土、青灰色粘質土となり遺構面は検出されなかった。遺物包含層はNo.32、No.38、No.42等で検出されている。

3．出土遺物　遺物がまとまって出土したのは、No.38、No.42の試掘坑である。土師器・須恵器・瓦器・瀬戸系近世陶器・中国青磁が出土している。

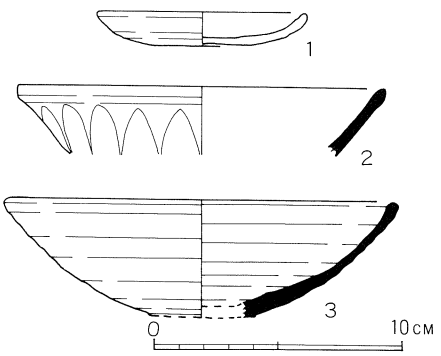


fig. 212　出土遺物実測図　1、土師器小皿　2、青磁碗　3、須恵器塊

土師器　土師器の出土量は、須恵器のそれよりはるかに少なく、皿と羽釜に限定される。皿は、ほぼ手づくねにより成形され、口縁部のみ回転力を利用したナデ調整を施している。

須恵器　須恵器の出土量は全体の半分以上をしめ、埦、壺、甕が主だったものである。これらのものは、その殆どが、神出や魚住などで知られる東播系の須恵器生産地で生産されたものである。埦は、粘土紐の巻き上げ痕がよく残り、調整の度合は低い。

瓦器　三足鍋の破片が少量のみ出土している。

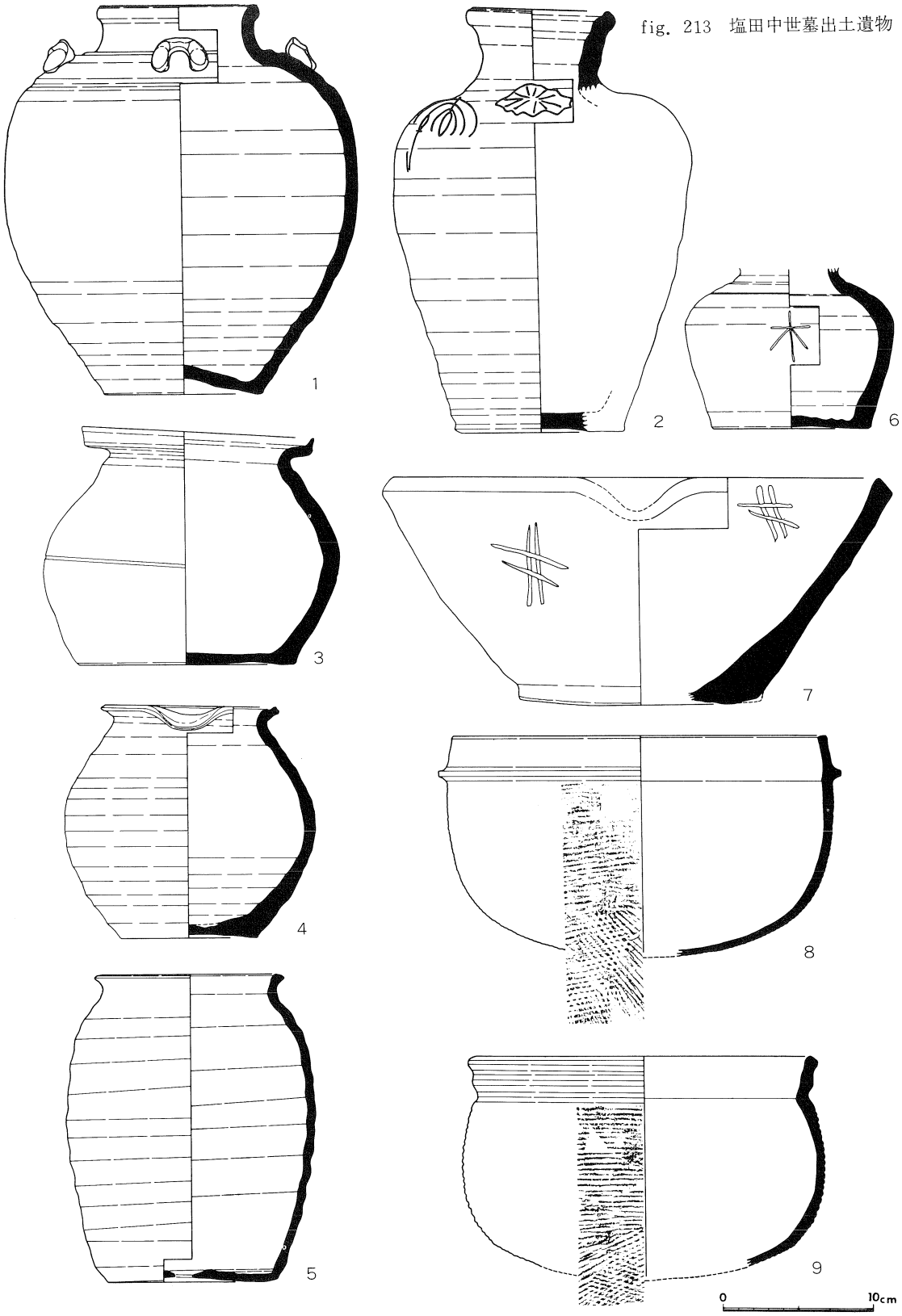
中国青磁　中国青磁は、越州窯系の青磁碗である。

出土遺物の年代は、形態などを検討するとその殆どが、12世紀後半と考えられる。

4．まとめ　今回調査した地区には、前述したように、条里制地割の痕跡が一部残存している。したがってその施行時期を解明することが調査の主たる目的となった。No.42の試掘坑では水田築造前のバラス上で焚火の痕が検出され、その中から完形の土師器皿が出土している。この皿は12世紀後半のものと思われ、平安時代末に属する。また、No.22試掘坑の東、現在民家の庭内で条里制地割の旧水路が検出されており、そこから同時期の須恵器埦が出土した。このように、今回の調査からは水田開発の時期は平安時代末以前には遡りえないことが判明した。

今回調査した東の丘陵上には、室町時代の火葬墓が存在し、また、南の丘陵裾には近世の一石五輪塔が存在している。このように、この地区の周辺には平安時代末以降の遺物・遺構が存在している。この事実は、調査で出土した遺物の時期と符合し、この地区の歴史が平安時代末に始まることが明らかとなった。

fig. 213　塩田中世墓出土遺物



昭和56年度　神戸市埋蔵文化財年報

昭和58年12月15日　印刷
昭和58年12月26日　発行
昭和61年９月30日　第２刷発行

発　行　神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
印　刷　神戸オール出版印刷株式会社
神戸市兵庫区新開地４丁目９番16号

広報印刷物登録・昭和61年第178号Ａ－６類